

# 儀式の道具

## かわらけとは

柳之御所遺跡からは、かわらけと呼ばれる素焼きの土器や、かわらけに乗せた折敷が多量に出土しています。かわらけは1回のみ使用された使い捨ての食器と考えられ、主に宴会で利用されました。当時の政治には、宴会や儀式が欠くことのできないもので、多量のかわらけや折敷の出土は、ここで多くの儀式が行われたことを伝えてくれます。同時期のかわらけが多く出土するのは平泉に限られ、特に柳之御所遺跡からは多く出土していることから、この遺跡が東北地方の政治の中心であったと考えられます。

かわらけにはロクロを使用して製作したものと、そうでない手づくねのもの2種類があります。手づくねかわらけは、京都文化の影響を受けて、基衡のころには平泉でも製作されるようになりました。また、かわらけの中には、灯りを点すのに使用したため内面に油煙が付着したものや、漆の容器として使用したものも見られます。

また、かわらけはこの遺跡が機能した12世紀の100年間を通して用



絵巻に見るかわらけと折敷の使用例

『餓鬼草紙』より  
Image: TNM Image Archives



いられたもので、少しずつ変化していきます。この変化が考古学での年代決定の方法のひとつとなります。

## かわらけの変化

柳之御所遺跡は、100年間のかわらけが通して出土する、平泉のなかでも数少ない遺跡です。このことは遺跡が、奥州藤原氏が平泉に来た当初から終焉まで利用されていたことを示しています。初代清衡の時期はロクロ使用のもののみが出土しています。器高の高い椀形が多いのも特徴です。2代基衡のころに手づくねのものが出現します。その後、手づくねかわらけの割合が徐々に増加していきます。3代秀衡のころには両方が使われていますが、手づくねかわらけが非常に多くなります。かわらけは器高が低い皿形の器形となり、口径が小さいことも特徴的です。

また、宴会でかわらけを使うときには、薄い板で作った折敷の上に並べていました当時の絵巻などには、折敷を使っている様子が描かれています。折敷も新しくなるにつれて形が変化して、小さくなっていきます。



かわらけ



折敷

## 白磁四耳壺

白磁と呼ばれる中国産の陶器です。産地は中国の福建省と考えられています。遺跡からは主に中国からの、輸入陶磁器が多く出土していますが、完形で出土したものはほとんどありません。平泉からは四耳壺と呼ばれる耳が付いたものや水注といったものが多く出土しています。

この白磁四耳壺は井戸跡から割れた状態で出土したもので、破片を接合し元の姿に復原することができました。器高は約26cmです。表面には、漆が染み込んだ麻の布が部分的に残存し、当時は壺の全体が布に覆われていたと思われます。なお、付着している漆は在地産と考えられています。

